

Cobb Hill Cohousingへの訪問

鈴木 哲 喜

はじめに

ローマ・クラブ「人類の危機レポート『成長の限界』」¹⁾の出版は、世界の人々が地球環境について強い関心を持ち、深刻さを意識する契機となった。

環境悪化の現状を踏まえ、地球全体の環境見通しについて、コンピュータによる世界モデル²⁾を使った地球環境のためのシミュレーションが行われ、研究成果として報告された。人間のさまざまな活動ともなう地球資源の利用状況がオーバー・フローであること、さらに廃棄物の吸収リサイクルが可能な自然の許容量、将来的な可能性などについて詳細に検証されたのである。

わたしたちの生活のあらゆる部分について、環境上の不都合が日々報告されている。農薬が野菜や魚介類などの食品中に蓄積され続け、土壌や飲み水が科学物質に汚染され、健康被害の原因となる。化石燃料の過使用により二酸化炭素の濃度が増加

し、地球温暖化と異常気象の原因とされる。酸性雨による森林被害と生態系破壊の悪循環。さらにフロンガスによるオゾン層の破壊にともなう南極のオゾンホール、紫外線による人体や生命への日常的な被害が報告されている。食糧問題、人口問題、エネルギー危機の問題など、身近な公害から人間や生命にとって脅威となる地球環境の悪化、さらに環境倫理や社会的不平等にいたるまで、幅広く議論され研究が進められている。

「今や、議論の段階は過ぎ、一人一人の立場で環境のためにより有効な方法が実践されるべき時期にきている。」

「否、すでに対策は遅きに失している…。」
「環境技術をさらに発展させれば将来の危機に対処できる。」

悲観的な未来予想と楽観主義が交錯する。

「人類の危機レポート『成長の限界』」の20年後、システム・ダイナミックス³⁾をふたたび用い、同時点における再検討がな

1) ドネラ・H・メドウズ/デニス・L・メドウズ/J・ラングス/W・W・ベアランズ三世著 大来佐武郎 監訳 ダイヤモンド社

2) 「ワールド3」とよばれるコンピュータ・モデル。マサチューセッツ工科大学 (MIT) のJay Forrester 教授が最初に考案したワールド1, ワールド2にデータ・ベースを増強した。

3) 「ワールド3」のモデリング方法を含むシステム概念

され、「限界を超えて」⁴⁾が出版された。環境が悪化の一途を辿りつつあることを既定の事実とし、持続可能性(sustainability)への具体的な処方提案された。

メディアによる表現

環境問題が新聞紙面を賑わし、テレビニュースが世界各地の気象異変と自然災害の映像レポートを流す。事実の深刻さとは裏腹に、どこかで見たことのあるイメージの数々が流し続けられる。恐るべき類型性と映像アングルが繰り返しお茶の間の読者や視聴者の前で展開される。災害時のヘリコプターによる決死の救出映像、被災者のプライバシー無視、不安な人々の表情と避難所の炊出し風景などである。報道内容は、単純化し固定化され、ますます洗練されて行く。映像は、カメラのフレームによって無意識的に善意をもって、あるいは恣意的に切り取られる。それらを見つめる多くの人々の関心あるいは無関心は間接的に、購読者数や視聴率の数字を介して、カメラを操作する側に影響し、潜在化される。ニュースの受け手は自らの安全を確認し、悲惨なエピソードに同情し涙する。災害の度に繰り返されるお茶の間風景は、メディア社会の今日的側面を鮮やかに反映しているのである。

提供スポンサーの宣伝映像が流される。慌ただしく時間は刻まれ、断片的な商品イメージが繰り返し流される。省エネルギー型の商品とエネルギー浪費型の商品が、同一のスポンサー企業の商品ラインナップとして提示される。企業の社会的な存在意義やメッセージよりも利潤追求の営業目的が

優先されているかのようなのである。さまざまな便利なアイデアや無駄な付加機能が基本機能に付け加えられ、次々に新しい商品が発表される。消費者のニーズは生産者に勝手に斟酌され、それに合わせたグレードの商品が前もって用意される。

大型流通店に溢れる商品やカタログの数々、需要を超える商品の供給や過剰なメディア戦略におけるイメージ作戦(コマーシャルや商品グッズなど)の膨大な無駄をわたしたちは目にしているのである。それらは、消費者が商品を選択するための自由の演出であり、欲望を駆り立てるための装置である。消費者の購買欲は生産者や広告会社によって創り出されるのである。

「あなたの自由で快適なアーバン・ライフの必須アイテムとなることでしょうか…」

消費者は客として王様扱いされるが、一方で、購買のための選択肢の幅は限定的である。

人々の経済的格差や収入(社会階級あるいは社会格差)に見合った消費のための広告行為と商品のラインナップ、恒常的なインフレーションは、20世紀の変容する近代性、あるいは近代性の名残り、それと見えない巧妙な差別化そのものである。

消費社会が構造的に持っている膨大な無駄を意識化することは、特に、資源とゴミなどの環境問題(持続可能性)としてだけでなく、日常の消費生活の中で、わたしたちの一人一人が置かれた無力さや孤立感を克服するための重要なヒントとなるであろう。

4) ドネラ・H・メドウズ/デニス・L・メドウズ/J・ランダス著 茅陽一監訳 ダイアモンド社

危機意識

閉鎖された地球に住んでいるという意識にあつて、総量的な地球資源や人間の生命の限界が問題となるのは当然である。危機意識は、国家や行政から国民に対して、危機回避のために一人一人の意識を高めるために喧伝され、世論として正統性を与えられて来た。戦時中の町内会による竹槍訓練や防災訓練が被害を最小にした、という検証はなされず、一方通行の防災訓練は継承され続ける。危機意識が説かれ、訓練が繰り返されること自体が自己目的化される。

時として、危機は過剰に意識され、現状維持という消極的な人間心理に働きかけることになる。そして、恐怖を煽り自己防衛のための政治的方法が採られることになる。冷害、飢饉、疫病の流行と戦争など、人々は何度も危機に瀕し、なすすべも無く立ちすくみ、災厄をやり過ぎて来た。

環境問題克服のための努力は、見方を変えれば、このような無常感に対して立ち向かう勇気であろう。一人一人がこれを人間の知性への信頼として意識し、行動することができるだろうか。大きな目的を忘れ、些末な目標数値やスローガンを大袈裟に唱

えることが、社会から排除されないためであつたりしてはならない。

一つの目標（戦争に勝利するなど）に向かつて邁進する、という全体主義的方法に捕われることなく、環境そのものが多様性を特徴とするだけに、その対応にも多様さが求められる。

環境への対応は、生活に直結する問題であるだけに選択肢の幅は狭く、現行の制度や人々の経験則や感性だけでは有効に機能し得ない。それは、消費社会と近代性を超える可能性でもある。わたしたち自身が開放された多重的な世界観へ向かう必要がある。

SUSTAINABILITY INSTITUTE と Cobb Hill Cohousing

SUSTAINABILITY INSTITUTE は、ドネラ・メドウズ⁵⁾ によってアメリカバーモント州ハートランド（ボストンの北西180キロ）に設立された、地球環境問題のための研究機関（think-do-tank）である。併設のCobb Hill Cohousingはドネラ・メドウズ（2001年没）の思想に賛同する人々の居住する農業を中心とする共同住宅、共同体（エコ・ビレッジ）であり、1996年

5) ドネラ・H・メドウズ（1941-2001）はイリノイ州の出身。カールトン大学で科学を専攻、デニス・L・メドウズ（Dennis L. Meadows）と結婚する。ハーバード大学で生物科学を学ぶ（後に生物物理学の博士号を取得する）。夫のデニスはMITで経営学博士号を取得。

1972年ローマクラブの委嘱を受け、「成長の限界」を3人の著者ととも出版する。29年間ダートマス大学で環境システム論、倫理、ジャーナリズム論の教鞭を取る。

1985年から2001年までの16年間、エッセイを新聞に寄稿し続け大きな影響を与えた。

1996年SUSTAINABILITY INSTITUTEを設立、Cobb Hill Cohousingの建設に着手した。

ドネラ・メドウズの著書

- ・The Limits to Growth (1972)
- ・The Electric Oracle: Computer Models and Social Decisions (1983)
- ・The Global Citizen (1991)
- ・Beyond the Limits (1992)
- ・The Limits to Growth – the 30 Year Update (2004)

7人の有志によって始められた。

神谷宏治⁶⁾、鈴木幸子⁷⁾、鈴木哲喜の3人は、2005年9月SUSTAINABILITY INSTITUTEならびにCobb Hill Cohousingを訪問した。訪問に先立って、約1年間にわたってCobb Hill Cohousing側との間で準備のための交渉が続けられ、手筈が整えられた。

訪問の目的は、直に組織(Cobb Hill Cohousing)は、それ自体が会社(Company)として設立され、その他さまざまな事業目的に合わせたいくつもの会社がCobb Hill Cohousing内に組織されている)とその住人に接触することであり、環境をテーマにした共同体の生活の実態を調査し、コミュニケーションの中からお互いを感じ発見することである。

Cobb Hill Cohousing側の丁寧な対応に助けられ、2日間に合計9人のメンバー(イーディ・ファーウェル、ジョン・バーソロミウ、ハル・ハミルトン、ベス・スウェイン、マリー・カーン、スージー・スウェイツァー、ダニエラ・マリン、フィル・ライス、ローリー・ローブの各氏)との個人インタビューを行うことができた。また、昼食と満月の野外で楽しい夕食のもてなしを受け、歓待された。

インタビューの質問骨子

- 1) 入居者一人一人のCobb Hill Cohousing参加の動機
- 2) Cobb Hill Cohousingにおける生活、

教育

- 3) ドネラ・メドウズの考え方との出会いについて
- 4) PRINCIPLES(憲章)とBYLAWS(内規)の扱い、あるいは組織のあり方について
- 5) メンバー間のコミュニケーションについて
- 6) Cobb Hill Cohousingの農業について
- 7) アメリカ合衆国におけるCobb Hill Cohousingの立場
- 8) その他

これらのインタビューに基づくCobb Hill Cohousingの全貌は、後日、改めて報告される。

現在、Cobb Hill Cohousingは、100ヘクタールの敷地に23家族が生活し、メンバーは共同体の運営に参加している。エグゼクティブ・ディレクターはハル・ハミルトンであるが、特別なリーダーとされている訳ではない。2001年ドネラ・メドウズ没後、柱を失って、メンバーは困難の時代を強く感じている。

組織の運営上、PRINCIPLES(憲章)とBYLAWS(内規)が設けられている。PRINCIPLES(憲章)はCobb Hill Cohousingにとって最も大事な創設の理念であり、メンバーの生活にとっての重要な指針である。とは言え、社会や行政上の現行の法律や地域の習慣などを尊重、遵守することを前提にしている。

6) 神谷宏治/建築家、日本大学名誉教授、「コーポラティブ・ハウジング 新しい住まいとコミュニティ」/ (共著) ダイアモンド社

「コーポラティブ・ハウジング」/ (共著) 鹿島出版会

7) 鈴木幸子/翻訳家、「脳性マヒ児と家族」/ (共著) 海声社

「ナバホ『射弓の歌』の砂絵」/ (共著) 美術出版社

統一 (UNITY), 美 (BEAUTY), コミュニティー (COMMUNITY), 公正 (EQUITY), 持続可能性 (SUSTAINABILITY), 相乗作用 (SYNERGY) の六つを憲章として掲げている。

Cobb Hill Cohousingの共同住宅の要の位置にコモンハウスという公共の建物があり、会議や瞑想をする部屋、食事のできるコーナーと広間、応接室、一部住居、ゲストルーム、子どものプレイルーム、地下室の作業場、チーズの貯蔵室などを完備している。玄関の壁には研修生受け入れの情報が掲示されている。多くの絵画とタペストリー (ナバホの織物やインドのミラーワークなど多数) が壁に掛けられ、いきいきとした豊かな空間を演出している。

コモンハウスを始めさまざまな場所で組織を運営するための会議が開かれる。何が環境にとって価値があるかなど、意思の決定にあたっては合議制が採られる。月一回の定例の会議では問題解決のため (なるべく短時間で済ますという申し合わせにもかかわらず)、長時間に渡って議論がなされるとのことである。その他に各種の委員会がある。コンセンサスを得るという手法は、クエーカー教徒に伝統的に存在する。ペットについての論議は長時間を要することによって、運営の難しさの一端を見る思いがした。動物は人間の規則に従わず、行動の方法と領域は彼らの要求に従うのだから無理からぬことである。

ドネラ・メドウズの住居だった建物が、

現在、SUSTAINABILITY INSUTITUTEとして使用されている。持続可能性の研究と情報発信などの活動を行い、Cobb Hill Cohousingはその実践のために建設された一体のものである。

共同体は、自給自足のシステムとして機能している訳ではなく、メンバーの生活も多様である。職業はSUSTAINABILITY INSTITUTEの研究員 (MITの博士号を持つ農業研究員や文化人類学者など8人勤務)、スタンフォード大学で教鞭を取るアニメーター、アーティスト、病院勤務、官庁勤務、獣医、農業などさまざま、仕事を共同体の外に持つ人も多い。知的密度の高い集団である。

農場では、ミルク、チーズ (コンクールにおいて全米一位の高品質)、オーガニック野菜、花、牧草、羊毛、メイプルシロップ (バーモント州のメイプルシロップはカナダのものと並んで有名である) などが生産される。リヤマ、馬に鶏、豚なども飼育されている。施設内にはこれらの生産のための会社が設立され、事業が展開され経営努力がなされている。初期投資が大き過ぎて、野菜以外の会社では未だ利益を上げていないというのが実態である。

共同住宅の建物は、省エネルギーを目指したグリーン・ハウスとしてさまざまなシステムが採り入れられている。外光を採り込めるようにした南側の広い窓ガラスは、3重になっていて、嚴重な断熱と暖房は高コストの住宅である。

持続可能性のシステムとしては、コンポスト・トイレ⁸⁾、ソーラー・システム⁹⁾、

8) 設置にあたっては州法により衛生面での問題が指摘されたが、廃液を肥料として使用しないことを条件に許可された。集中管理されたシステムになっている。用便後、一握りの用意されたオガクズを便器内に投入する。蓋ができて、ほとんど臭わない。

9) 給湯と暖房用。ソーラー発電ではない。

バイオマス燃料¹⁰⁾による地域暖房¹¹⁾、複層式住宅¹²⁾、住居をクラスター構造に配置¹³⁾、無農薬による野菜作りの農業や酪農(ジャージー牛による)、CSA¹⁴⁾などがある。

広いアメリカの田舎にあつては、交通手段として車の利用は不可欠であり、小型車やハイブリッド車(日本製)が多く使われていた。公共交通機関を利用して密集した地域を移動する都市の生活に比べて、必ずしも効率的省エネルギーとは言えないかもしれない。単にエネルギー効率や初期投資の高低だけで無く、ここでは生活を通して環境問題全般にわたる実験と実践がなされ、将来を見越した持続可能性追求の挑戦が行われているのである。

近代化と都市

ヨーロッパ社会を中心とした近代化の流れの中で、都市は肥大化し地方との格差を拡大していった。

農地を持たない自由農民は、都市へ流れ込み自由労働者と化していった。産業革命にともない、自然経済から貨幣経済へと経済全体が根本的に構造を変化させていった。富の集中と資本の形成が行われた。貨幣経済と富を背景にした新興のブルジョワジーが新しい時代の担い手となった。彼らはブルジョワ革命を通して、特に、都市において社会的地位を確かなものにしていっ

た。近代における社会階級の誕生である。

古くからの大家族制は、都市の狭い生活空間や家族の経済基盤の変化にともなつて、聖家族¹⁵⁾に見られる両親と子ども、愛と理想の家庭を典型とする小規模な家族へ形を変えていった。

首都は他の都市から差別化されることになる。機能は整備され、近代国家あるいは専制君主の威厳に相応しい、美しく立派な首都であることが求められた。議会や行政庁舎などの首都機能とともに街灯や下水道が建設され、公共施設(道路、広場や博物館、図書館など)が整えられた。

国民への福祉が近代国家の重要な命題として意識された。国民の安全と自由は、国家(神)に対し国民の義務(兵役や納税など)を引き換えに保障されるべき国民と国家の契約である。

しかし一方で、それはさまざまな差別の元凶ともなった。自国民とそれ以外、あるいは国家の中心とそれぞれの人々や地域との距離の違いが意識されることなどである。

欲望は、個人の領域から国家の領域まで、あらゆる機会と場所(戦争など)にあつて、外的には衝突し、内的には共鳴し合うのである。人々は、国家の政治戦略に合意し、自らの問題としてとらえ一喜一憂する。国家は国民の生活(自由と福祉)を保障するという大儀のもと、利害の対立する外国との政治ゲームに奔走するのである。

10) 燃料用の薪は2年間の乾燥が必要のため、広い敷地に大量の薪がうず高く積み上げられていた。

11) 非常に緯度も高く冬は寒い(北緯44°位)。

12) 2世帯で1戸の住宅建築様式。

13) ブドウの房状の構造の意。全体のインフラを有効に使うことができる。平地を農地として利用するため、住居は傾斜地に建っている。

14) 消費者への産地直送のシステム。

15) キリスト生誕の図、聖母マリア、ヨセフと幼子キリストの理想家族。

ヨーロッパを震源地とする近代化は、長い時間を掛けて世界へと伝播していった。植民地主義（ヨーロッパ近代システムの拡大政策）は、政治、経済、文化とあらゆる分野にわたって、独善と啓蒙の影響力をもって世界へと拡大した。

農 業

農業問題は日本の国内問題として、食糧自給率の低さ、地方や農村の過疎化の問題と併せて重要なテーマとされることが多い。国家の戦略上の問題として、あるいは外交上の問題としてだけ人口や農業が取り上げられるのも不幸であり皮肉である。地球規模の農業問題と日本における農業問題は曖昧なままに議論されがちである。

“うさぎ追いしかの山！小ぶな釣りしかの川！”

少年期の記憶へのこだわりや伝統的な自然観に基づく自然回帰など、情緒的なアプローチだけでは今日の問題の解決策は見出せないのも当然である。

自然経済から貨幣経済へ

四季を通じて毎年繰り返される農作業、わたしたちの周辺には、地域の自然環境に合わせた伝統的な農業がある。収穫される農作物は自然の条件によって限定され、生産は季節に合わせて1年の周期（二期作や二毛作も基本的に同じ）で繰り返される。一般的に、債務の年末払いや物納（年貢）などの自然経済の形を取ることになる。

農村＝農業は、近代化にともない、自給

自足的な地域経済から都市を消費地とするようになり、都市の貨幣経済へと取り込まれていった。農作物に限らず、市場において商品は貨幣に換えられ価値の劣化を回避する。飛躍的な富の蓄積が可能になるのである。

自然経済から貨幣経済へ、構造変化はスムーズに連続的に移行していった訳ではない。現在でも、地方に限らずわたしたちの生活の中に盆暮れの習慣は残され、それぞれの経済が重層的にバランスを取り現実的に機能している。

地域経済型の農業は都市近郊型へと変貌し、市場価値に照らし合わせてより効率の良い生産方法が採られる。利潤を追求する資本によって大型化と切り捨てが盛んに行われてきた。

最も発達した資本主義国であるアメリカ合衆国において、家族経営による中規模農業は大資本による大農場に吸収され衰退していった（ハル・ハミルトン談）。農耕に適さない土地を農耕地へ転換するため、大規模なダム建設や開発が近年繰り返されてきた。大規模経営においては、大量生産によって効率的な生産が可能になる一方で、生産される農産物は、廉価な商品として世界市場を席卷することになった。世界各地の固有の農業を圧迫し、伝統的な生活文化を破壊するのである。

さらに皮肉なことに、単一作物を大量に生産することによって、アメリカ合衆国自身の土壌と水資源（地下水の大量汲み上げによる）の荒廃と枯渇が心配されているのである。

農村＝共同体、人間と自然の接点では、労働を通じた、自然と人間のコミュニケー

ションが重要な意味を持つ。人々は自らの欲望を自然に投影するのである。北海道の寒冷地は、もともと稲作には適さない自然環境であったが、稲の品種改良によって米が栽培されるようになった。明治以来の入植者たちの「旨いものが食べたい」という飽くなき願いが北海道の田園風景を生成していった。自然と人間の欲望のせめぎ合いが地域の風土（水田の広がる景観）や文化を形成する典型である。きめ細かい農業、土壌の地力回復力に合った農業など、地域の風土や文化の多様性に合わせた生活は、まさに持続可能性そのものである。

農業への単なる情緒的な回帰願望は、近代におけるこのような農村や地域共同体の連戦連敗の失地を回復する、という消極的動機によってのみ説明されるべきではない。ましてや都市住民の煩雑な生活から来るストレスと、それを解消するための癒しとしてのパストラル（牧歌）の追求などではないのである。

田園風景は都市生活者にとって、過密からの解放、あるいは失われた楽園への願望という悲痛な思いを表現する。

農業は、広い農地を贅沢に使う特殊な産業である。裏を返せば、安い不変資本に頼らなければ、市場の商品として農産物の安い価格は実現しないということである。都市との距離に応じてコストに見合った作物が生産され、距離にともなう流通コストをカバーせざるを得ない。当然、流通コストが下がれば、遠隔地から安い農作物が都市へ運ばれることになる。

農村の過疎化は、文化（重労働、女性の地位、学校とくに高等教育の不備など）や

経済性的問題と多岐にわたるが、これらは都市の問題（過密、荒廃など）と一対の複雑な現象でもある。従来型の都市と農村の、「搾取し」、「搾取される」階級闘争としてのみ解釈するだけでは済まされないだろう。

乾いた雑巾を絞るような寸刻みの技術だけでなく、環境問題への新しい枠組みによる救済はあるのか？新技術に期待されるところ大である。

Cobb Hill Cohousingについての考察

Cobb Hill Cohousingにおいて、新しい農業のあり方は具体的に意識された。農村と都市の二者択一ではなく、農業は、新しく創造される必要があったのではないだろうか。ある規模の、人間の身丈に合った生活域が意識された。生命への意識が、自然と呼応する人間の意志が、バーモント州ハートランドの風土が、Cobb Hill Cohousingを作る契機となったのではないだろうか。

バーモント州は、アメリカ合衆国独立時の13州に入らず、歴史的に独自の道を歩んできただけに、強い自立の意識を持った精神風土を持っている。Cobb Hill Cohousingのあるハートランドは、反戦平和のコンサートで有名なウッドストックのすぐ近くに位置し、緑豊かな景勝の地でもある。特産品のメイプルシロップは、Cobb Hill Cohousingにとっても重要な産業資源の一つとなっているが、近年は酸性雨の影響で生産量は低下しているとのことである。

アメリカ合衆国の自然保護運動史におい

て、アルド・レオポルドの著書「野生の歌が聞こえる」が大きな影響を与え、国立公園設置に貢献したとされる。未踏の地に（原生自然）足を踏み入れる。その興奮と充実感について記すアルド・レオポルドは、森林警備隊員であり、詩人でもあった。

Cobb Hill Cohousingを案内しインタビューに応じてくれたマリー・カーン（Cobb Hill Cohousing設立のメンバー）のアルド・レオポルドへの評価は高く、「自然保護の原点、最右翼である。」とのことであった。さらに、マリー・カーンは、それに続いてCobb Hill Cohousingにおける精神性、自然（原生自然であり、他者性、あるいは禅のような状態と考えられる）との対峙の仕方について語ってくれた。広く開かれた窓の外の広い草地に続く森林を前にして、「秘密の場所が幾つもあって、そこには建物を建てることができない。」と話していた。

マリー・カーンの家は、築後200年と言う大変立派な住居である。絵画と立派な家具に囲まれた家に案内された。玄関わきにはりんごの木があり、小さな実がたわわに実っていた。庭先の家から少し離れたところに、メイプルシロップを煮詰めるための製造所の建物があつた。

共同住宅

共同住宅は、もともと都市における不可避な住宅問題として取り上げられて来た。都市の空間的な狭さは、今に始まったことではなく、古くからの都市の宿命であった。ヨーロッパの多くの歴史的な都市は、中世以来、城壁に囲まれた狭い空間に多くの人たちが寄り添って生活し、衛生状態も

悪く、建物を立体的に高く聳え建たせ、増加する人口を抱え込んでいった。

近代以降、特に首都が国家の顔として君主の権威を表現するようになる。首都は各都市のモデルとして意識され、都市機能の整備が行われるようになった。街灯や下水道、広場、公園、道路、鉄道など都市のインフラが造られていった。限られた土地を有効に利用する都市のライフスタイルができ上がっていった。多くの市民は、アパートやマンションなどの集合住宅に住むことになる。ルールを設け、住人がルールを承認し、生活のある部分を互いに共有する共同住宅は、都市設計上、また住空間を快適にするため、試行錯誤が繰り返され計画されて来た。

江戸の長家は、庶民の生活の場として、心あたたまる人情話、強欲な大家と少し間抜けな店子でお馴染みの、井戸端や便所を共用する共同住宅である。

現在の東京の過密ぶりは、戦後の経済発展をそのまま表し、JRの高架線から360度びつしり建物が立並んでいる。東京を始めとする巨大都市は、個人の生活感覚を遙かに超え、取りつく島無しの状況である。

近年、共同住宅として北欧起原の共同住宅の考え方が日本に紹介されて来た経緯については、神谷宏治を始めとする建築家たちの都市への問題意識と長年の努力に負うところが大きい。

ヨーロッパ社会と日本社会における公共性の起原や構造は対照的である。近代的なエゴの意識とイエ制度における帰属意識、民主主義への葛藤とジャーナリズムの発展への対応など違いは大きい。ヨーロッパ文明の受け入れそのものを近代化として来た

わたしたちにとって、都市における空間の共有と公共性は、異文化受け入れの長い歴史であり、矛盾と苦悩をともなうのである。

生命主義

共同体の解体、あるいは共同幻想の崩壊が叫ばれて久しい。

共同住宅の共同性とは何か、さらには、環境との共生の概念とは何か。それらにおける共同性はどこからもたらされるのか。わたしたちは、何に対して共同の意識を持ち、どのような条件で共同性は意識されるのだろうか。勿論、卑近な金儲けや、運動会の赤や白の単純なグループ分けでも一時的な共同性は確保される。

山川草木悉皆仏性は、日本古来の生命主義的表現であり自然発生的な世界観の表現でもある。動物から生き物全般へ、植物から山や川や風まで、すべての存在に対して生命を意識するアニミズムの徹底である。

わたしたちは一般に地域的で独自の文化、言葉がその典型であるが、を抛り所にしている。一方、人工的で恣意的な文化と対照的な自然発生的なものがある。同時多発的で世界共通の自然発生的性格を持つもの、前歴史的で多産を特徴とする自然信仰は、たとえ同じ起原を持たなくても、似たような表象を示す。

生者が死者の霊と語り、亡霊と戦う。ハムレットは、ルネサンス期にあつてなお中世的な名残りを留める物語である。主人公のハムレットは父親の亡霊の告白に苦悩する。生と死は、古代の人たちの生活空間において近いものであった。生と死の

境界は、曖昧に地続きで連続性を持ったものであった。あるいは、裏山に先祖の墓を抱いて生活する人々の想像力は、死者をも分け隔てしなかった。これに似た表現の例として、わたしたちは、中世的な世界観を鮮やかに示した演劇（神事としての芸能）「能」を思い浮かべることができる。

ルネサンス以降、ヨーロッパの歴史における近代化は世界の中でも特異な存在である。臨床医学の発達にともなう、死体解剖の方法そのものが契機となつたとされるが、死は徐々に生から隔離されるようになった。死を絶対無とすることで生の絶対的存在、言い換えれば、一回性の生が強く意識されるようになった。

具体的（現世的）な生は、日常の時間と空間として意識され制度化された。その結果、近代的制度は、わたしたちの前に歴史的事実として重たく横たわっているのである。わたしたちは、社会の閉塞感や矛盾を理由に、近代という時代の終焉として、これらを簡単に捨て去ることはできない。

日本的アイデンティティーを強調するあまり、日本起原の生命主義である中世的世界観（古代を起原とする）を普遍性と見なし、その優位性を主張してみても仕方のないことである。

一方には、ヨーロッパの近代以降のヒューマニズムの流れの一つである国民の福祉を国家の命題とする近代国家があり、生命価値を共有し善としている。それは、自然発生的な生命主義とは異なり、死生観も感受性も全く別のものである。

二つの生命主義を相対化した上で、人類共同体の共同性の根拠は人類愛である、あるいは生命主義である、の一言だけで将

来を展望することは難しく、解消し得ない矛盾を抱え込むことにもなる。

わたしたちは、過去に後戻りすることはできない。

地域共同体は、自然に対する人々の利害、イメージや欲望を前提にした生活感、感受性を共有する。秩序が重視され、一つの社会として意識される。共有する強い感情は絆であり、その反面、排他的な力が強く働く。

自然が最も大きな規制要素として働く限り、人々にとってその絶対性は強調され続ける。空中都市や宇宙空間のような人工の閉ざされた環境が強く意識された結果、自然も相対化され、人々は地球も閉鎖空間として感じるのである。都市を開放された空間としてデザインする、地方も都市と同じ様に開放される必要がある。

ふたたびCobb Hill Cohousingについて

Cobb Hill Cohousingにおける持続可能性の試みは、地球環境を問題にし前提にしながらも、完全な救済プログラムを持つことを目的にするのではない。Cobb Hill Cohousing自体が生活文化の場面からダイナミックに変革のための場所として存在す

ることが重要なのである。自らが、グローバリズムの均質空間において、ダイナミックな変革の特異点となろうとしているのではないだろうか。

Cobb Hill Cohousingの23家族の共同体は、昔ながらの、わたしたちに馴染みの共同体などではない。ましてや日本のムラ社会に見る地域共同体と同じだと考えてはならない。自然に対し必死に立ち向かう、労働による住民の共感（感情の共有）を根拠としただけの共同体ではない。自然環境を前に人間が生きなければならない過酷な労働を生活の条件としている訳ではないのである。PRINCIPLES（憲章）を生活の中心に据え、発足時にはインターネットを駆使し参加者を募っていて、面談によって新しい会員を選ぶという意識的な組織作りをしているのである。

メンバーはクエーカー教徒であったり、ユダヤ教徒、仏教徒であり、ある人は瞑想の時間を持ち、またベジタリアンであったりと考え方も多様である。

掟と排除、感情を共有する共同体などではなく、Cobb Hill Cohousingは言葉を重視しお互いを信頼することを選択し、将来の目標を掲げ実践するという知的挑戦を目論む集団なのである。

参考文献

- ・「成長の限界」D・H・メドウズ/D・L・メドウズ/J・ラーンダス/W・W・ベアランズ三世著 大来佐武郎監訳 ダイアモンド社
- ・「限界を超えて」D・H・メドウズ/D・L・メドウズ/J・ラーンダス著 茅陽一監訳 ダイアモンド社
- ・「消費社会における神話と構造」ジャン・ボードリヤール著 紀伊國屋書店
- ・「公共圏という名の社会空間」/花田達朗著 木鐸社
- ・「環境倫理と風土」/亀山純夫著 大月書店
- ・「野生の歌が聞こえる」アルド・レオポルド著 新島義昭訳 講談社学術文庫